古今夷曲集

萬載社歌集

德和歌後萬載集

全全全

昭和七年七月十日
昭和七年七月十四日

印刷
發行

有朋堂文庫
古今夷曲集・萬載狂歌集・德和歌後萬載集
（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦捷一

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　合資會社　有朋印刷社

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

緒言

古今夷曲集は浪花の人行風號は生白堂寛文五年の編に係り、名の如く古へより其當時に至る迄の狂歌を萃めたるものにして、後陽成院第八の皇子智恩院御門跡良純法親王によりて、後西院天皇の叡覽に供したる事、後撰夷曲集の跋文に見ゆ。狂歌の沿革を窺ふべき絶好書なり。今、内容のよく整理せられたる元祿本を以て底本とせり。

萬載狂歌集と德和歌後萬載集とは何れも四方赤良即ち蜀山人の撰する所にして、前者は天明三年、後者は天明五年、共に所謂天明調の代表的詠作を萃めたるもの、江戸狂歌の粹は擧げてこの内にありと稱するも不可なからん。

狂歌は古への歌集中に散見せる俳諧歌又は戰記文學等に出でたる落首の類に淵源し、德川幕府の始めは專ら京阪地方に流行せしが、天明時代、江戸に四方赤良、唐衣橘洲其他幾多の狂歌師の出づるに及び、最も高調に達して、一時翕然として天下を風靡するの概を示せり。蓋し爛熟せる江戸文明の餘澤にして、寔に擊壤鼓腹の太平樂と稱すべく、輕妙なる洒落と、

奇警なる場當りと、巧妙なる古歌の滑稽化とを以て能とし、二三大作家を外にしては、多く創作的價値と文學的色彩との認むべきものなく、川柳に見るが如き、單刀直ちに人の肺腑に入る底の諷刺も亦これあるを見ず。但その遊戯文學としての妙味に至りては滾々として盡くる所を知らず　之を鎖閑の慰藉者として、又これを當時の世相の側面觀察として、讀書子の必ず逸すべからざるもの也。

大正四年六月

校訂者　塚本哲三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目錄

古今夷曲集

卷第一　春歌……七
卷第二　夏歌……二五
卷第三　秋歌……三七
卷第四　冬歌……五三
卷第五　賀……六一
　　神祇……六三
卷第六　離別……六六
　　羇旅……六六
卷第七　戀歌……七七
卷第八　雜上……九五
　　物名……一二五

卷第九　雜下……一三一
　　哀傷……一七六
卷第十　釋教……一八〇

萬載狂歌集

卷第一　春歌上……二三一
卷第二　春歌下……二四三
卷第三　夏歌……二五一
卷第四　秋歌上……二六二
卷第五　秋歌下……二七〇
卷第六　冬歌……二八二
卷第七　離別歌……二九二
卷第八　羇旅歌……二九六
卷第九　哀傷歌……三〇三

卷第十　賀歌……三〇八
卷第十一　戀歌上……三一三
卷第十二　戀歌下……三三三
卷第十三　雜歌上……三三五
卷第十四　雜歌下……三五〇
卷第十五　雜體……三六七
短歌……三六七
旋頭歌……三七二
折句……三七二
物名……三七三
廻文歌……三七四
卷第十六　釋教歌……三七五
卷第十七　神祇歌……三八一
卷第一　春歌……三九七
卷第二　夏歌……四二〇
卷第三　秋歌……四三三
卷第四　冬歌……四五三
卷第五　離別歌……四六五
羇旅歌……四六七
卷第六　哀傷歌……四七二
卷第七　賀歌……四七六
卷第八　戀歌上……四八三
卷第九　戀歌下……四九三
卷第十　雜歌上……五一二
卷第十一　雜歌中……五二八
卷第十二　雜歌下……五四〇
卷第十三　雜體……五四八
短歌……五四八

旋頭歌……五五三
混本歌……五五四
折句歌……五五四
物名……五五五
廻文……五五六
卷第十四 釋教歌……五五八
卷第十五 神祇歌……五六二

古今夷曲集序

四角柱やかどらしや、角のないこそそひよけれ。むかし〳〵いふにいへぬ物の中より、丸きものの一つおひて、二つになり三つになりし時より、夷曲歌は始まれりけり。今狂歌といふなるべし歌は人の心を種として、言の葉しげりそふものなれば、只情の丸いがよいとなり。まづ天照太神の御宮居は、丸木をもて造れり。諸〳〵の御社にも鏡をかけらるゝは、丸うて空しうて、よろづ直に寫るを見せしめたまふなるべし。我國は國津神の御國なれば、春の神をむかふるにも、鏡餅とて、第一丸きをぞ用ふなる。草のもち、粽などいふは、有爲の色相を顯はすならん。任他花の香に馴れし衣を返し、單も袷のうら盆になれば、男童は山寺の御兒縮、折から攝待の茶筅髪にゆひなし、ともどち來よとて小手招く。しかも明衣の廣袖を著、未通女等は鬢の髪の經ぬの嶋田わけ、夕風の吹返しにゆひて、いざをどろといふより、手拍子とり足どりする。十五夜の月の輪の如くにこそはをどれ。小夜風に行きかふ袖の移り香は、浮きたる戀のしるべにて、しのの小篠のしのび〳〵にいひより、いつしか昵じき中と

なり、末の松山さゝら波は越すともと誓ひ戯るゝあまりに、あの御のさへ、女がゆく〳〵、お目もとの入はしやうや、それをそちが報うて何せうぞなど、左禮が實になり、あは緒も今は片糸の、此方彼方に引別るゝを、妹背山の中に芳野の川のよしやといへど、印南野のいなといふ諫むるに、猶口舌たら〳〵なりければ、そちも斷りこちも然なりと、蠟虎の皮のやうにもてなすを、諸共にそとほゝゑめば、さればこそ思ふ中の小鬪諍、詞の花をちらすのみ、根葉はあらじ、先盃をさすが石木にあられ酒、心よわくもの跡をばえ申すまい、しやんとさゝせられよと、女かたへ戻させ、これより五百八十年と祝ふを、丸うなつたといひ、一國一家のわれて齊ふるも又々かくいふべし。まいて佛の道には、丸の中に心といふ文字を書きて、身の一大事を觀じ知るとなれど、こちやしらぬ生死山の蛭が知つた生死、抑も心を丸うするには、和歌にしくはなしと聞けど、その樣優ならんとすれば心たらず、艶なるは獺のたはれをのたはれ過ぎ、つよきは片田舍の者の物いふに似てなつかしげなく、鑽れば石より堅く、頭をふりあふぎ見れば、須彌の山より高しとなれば、くだれる我等の學ば

んには、水の月を望める獣にことならざるべし。さらば鉋をもてやまはさん、小刀にてや削りなさであらず形なき心なれば、さは徒なるべし。ゐなかにも狂歌をもてあそびね。此歌久堅の天にしては下照姫に始れりしを、荒鐵の地にしてすさのをの尊、三十文字あまり一もじによみたまひてぞ和歌となれりける。しかはあれども、人の代となりても、聖德太子此樣を捨て給はざりけらし。いはく釋氏に西方の教をのべ、聖の道に不屑のいさめあるが如くなるべし。それより後は文字の數和歌をうつす物から、猶しれたることのみもてつづくるとはいへど、折にふれ事に臨みて、まれ〳〵詠めりしを、きぶき數寄者ら出來て、近き代よりぞ百首二百首數百首に及びては詠みける。それが中其外こゝらの人のよめるにも、あまたの病を除かず、上下かけあはざる多かり。狂歌とて詞こそまけくもいはめ、心は正しう身を修め國を治め、爰を得彼所をしる業なれば、いかで妄がはしきをよしとせん。思ふに心正しからぬは、他を損ひ身を亡なふ佞人にひとしく、病あり上下かけあはざるは、盲聾腰曲み足たたずなどやうの片輪者に同じかるべければと、和歌の例をもて四病八病を禁

むる中に、一際いひかなへたらん歌に、輕き病はゆるす方もぞ有りける。又昔今に落書といふには勝れたる作もあれど、かれは世を諷し人を謗り、あるまじき物なれば、是に載する事なし。古く聞き今みる歌にも、事の情齊り、笑種ならんを選びあつむとはすれど、末卷にいたりては、尺八竹の一よのみならず、三世の佛の理もあれば、巫のすゞろごとならねど、詞こはく、和歌にはいかにぞ聞ゆるをまじふる事になりぬ。是おとなびたる人の爲にはあらず、童べの殿のお尻からぎよの口遊を、狂歌にいひかふるたよりにもとて、千歌十卷なづけて古今夷曲集といふ物、みな其本に還るわざなれば、むかしをたてる名なりけらし。かくてよい春や若うならせられたと、詞に花を飾りいふより、本尊かけたかの鳥の聲をまち、紅葉を折りて簪にもし酒の燗をもし、雪女ふらい〳〵ふる妻いとしなど戯れ、春夏秋冬にいらぬ草木のえもえ知らぬたはことといひてあそぶも、かしこき君の御惠、八島の外までの家々の諺、或は頤膳の下にさがり、肩は頂の上にのぼりたるやうの、唐の大和の異樣なる詞、おさあいをあひや手打川水の阿羅、いな舟の棹頭々々、土佐の手手甲、大

和の元興寺に、隱期などやうの事をもてつらね書いちらすを、見る人聞く人刮ぐるよりも可笑がり、嗤と笑ふに罪をうしなへば、自から情の丸うなるべきよすがなるべし。莊周がいへる菓三つ四つの、跡先を諍ひ、狼のおそろしき頰をなし、羊のあゆみの近づくをも知らぬたぐひの人は、己が迷ひに情を奪はれ、求むとも笑ふによしなかるべし。あめにます大黑の能をきくに、一に俵をふまへ、二ににつこと笑ひ、三に三界の福珠を袋いつぱいに入れ、お顏の色のくろうなるまでもて歩き、笑ふ家には必ず來りて福をあたへ給ふ。これにも三郎惠美須殿、お前の海の鹽のめをし、常にめでたいを抱いて、信ある者には給んとなり。是を見彼を聞くに、機嫌よう笑ふが卽ち福德なり、菩提なる事を知れと、寛文五年十月一日にしるし終りぬる。行風が身のおろかなるをも忘れ、後の嘲を顧みずといへども、これを好まんものの爲には、いさゝかのたづきともなるべければ、なにはのよしあしのふしぶし、眞薦草のかりにも翫び、猶形にそへる影法師の如く、身をはなたずなれ行かば、をかしき色の情にそみつゝ、夷歌ときくに笑ふなかだちともなれとなり。梅といへば口に

酢たまり、苦參の咄には顔をしかむるなれば、十王の口澄だ貌、天狗のはなだかう慢ずるものも、此歌を聞きもしよみもせば、阿々々とこそあらずとも、屈々とは云ふべし。現在の果にてきしかたゆくすゑを知るといへば、此わざを忘れず、今より終の夕までも、腹たてずの正直坊、笑ふのみならば、情の角菱の病ひひしくと癒え、眞丸になりなん後、人仁といふこゝろを持薬に用ひば、彼の笑ひ佛とやらんにならざらめかも。

古今夷曲集　巻第一

春歌

ふる年に春たちける日よめる　源重秀朝臣

本歌アリ
年の内の春の小袖は一しほの淺黄とやせんこ染とやせん

春たちける日よみ侍りし　行風

山眉にかすみをひきて腰すそも優なる春の立ちすがたかな

義綱

立ちそむる霞の衣のはつれ雪春のきにける紋所かも

正長

たばこのむ内より春は來にけらし烟もかすむはなのさきかな

春のはじめの歌　哥　慶

本歌
春たつといふばかりにや大ぶくの水氣も霞みて今朝は見ゆらん

滿　永

ちはやふる茶筅もけさはあらたまりたつ大ぶくの神のはるかな

入　安

春くれば色も花香も別儀にて宿の大ぶくたつかすみかな

春　房

釣棹のたけ高からん一節をこゝろにねがふ和歌夷振り

一休和尚

餅つかずしめかざりせず松たてずかゝる家にも正月はきつ

行　安

きのふまで以ての外にさぶ六の十八公の門のはるけさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com